序論

本研究は、五行説が漢代の経学上で如何に発展したかということについて、論述を試みる。

五行説はすでに先秦時代に存在していたが、この期間に生み出された様々な言説が、漢代に至って整備・総合化された。この整備・総合化が、後代の発展・飛躍に繋がったのである。二千余年に亙る五行説史に於いて、漢代は、謂わば最初の成熟期にあたる。

漢代の、とりわけ経学に関連する五行説の傾向は、次のようにまとめることができるだろう。先秦時代に展開された様々な五行説が、前漢期ではそれぞれ別個に発展し、そのうちの月令・五徳終始・洪範五行等が、儒者にも用いられるようになった。前漢末頃になると劉向・劉歆がそれらの体系化を試み、後漢期には分野を越えた議論が活発化した。これは、経学が各経典ごとに整備・展開された後に、前漢末頃から兼修の傾向を強くし、そして五経を横断した議論が活発化して行ったのと、同期している。

五行説の歴史に於いても、漢代の学術に於いても、当時の五行説は重要な位置を占めている。そこで、本研究は漢代経学に於ける五行説を考察する。

五行とは何か

そもそも、「五行」とはどのようなものか。林克氏による定義が、要点を押さえている。

五行は各々が木・火・土・金・水の五物質の性質のどれか一つをもち、五者間に存在する序列に従って相互間の関係を規定しあう五気である。両者（平澤注：陰陽と五行のこと）はひとしく盛衰・集散して、事物の生成・消滅を含むあらゆる変化をつかさどる作用因であるとともに、事物を構成する質料因である……(中略)……五行は五分類できるあらゆる事物の範疇である。（1）

具体的に言えば、方位・季節・五原色など異なる領域の事物を五つの分類（「木・火・土・金・水」）に大別し、同じ分類に入れられた事物同士に、共通の性質・作用や対応関係を見出そうとすることである。たとえば、暖かくなり行く季節である春と、太陽が昇る方角である東は、同じく「木」に分類される。そして、この「木」というカテゴリーに、色彩では植物の色である「青」が属する。そこで、春に天子は青い服を身にまとい、東の郊にて春の気を迎える。このように、本来異なる領域に属する事柄同士を、五行への配当を介して結びつけ、関連させて考えるのが、五行説の第一の特徴と謂えよう（2）。

また、「木・火・土・金・水」の間に、「相生」「相克（相勝）」「相沴」などの相互関係を想定し、更にそれを他の領域の物事に適用させるのも、五行説の特徴である。例えば、「木は土に勝ち、金は土に勝ち……」といった相克の関係を王朝交代史に適用することで、「黄帝（土）に夏王朝（木）が交代し、夏王朝（木）に商王朝（金）が交代し……」という歴史観が生み出された。

五行説は戦国期に成立し、秦を経て漢代になって大いに盛り上がった。とりわけ後漢期には、経学・歴史学・天文学・医学等々に於いて頻繁に用いられ、五行によって様々な現象・規律が説明された。例えば、『白虎通義』五行篇には、次のような文言が見える。

火、陽、君之象也。水、陰、臣之義也……(中略)……五行之性、火熱水寒、有温水、無寒火、何。明臣可爲君、君不可更爲臣。

火は陽であり、君主の象である……(中略)……五行の性質では、火は熱く水は冷たい。温かい水は存在するのに、冷たい火が存在しないのは、何故か。これは、臣下が君主になることはできるのだが、君主が再び臣下の身分に戻ることができないことを意味している。

子之復讎、何法。法土勝水、水勝火也。

子が仇討ちをするのは、何に基づくのか。それは、土が水に勝つのが、水が火に勝つからであることに基づくのである

前者では、君主を火、臣下を水とした上で、臣下の即位が可能であることと、君主の退位・臣従が不可能であることを、水・火の性質に関連付けて説明している。後者では、「火が土を生む（＝土は火の子）」「水は火に勝つ（水は、土の親である火を害する）」「土は水に勝つ（土は、親である火を害した水を害する）」という五行相生・相勝によって、仇討ちの正当性と五行の法則との共通性を述べる。なお、『白虎通義』五行には他にも、妻が家を離れて夫の家に嫁ぐことや、水に浮く臓器と浮かない臓器の違い等、様々な事柄・現象を五行によって説明している。

多くの場合に於いて、五行は分類概念として用いられ、かつ、その分類は相対的である。例えば、人間は、木に属す「鱗虫（鱗のある動物）」や火に属す「羽虫（翼のある動物）」等に対して、「裸虫（鱗・翼・毛・甲羅などで覆われていない動物）」として土に配当される。一方で、聖人にはそれぞれ徳が配当され、例えば漢の高祖劉邦は火徳とされる（3）。しかし、そこで、人間であり劉邦であるという人物が果たして「土」なのか「火」なのかということを、固定的に定めようとはしない。鳥（火）や魚（水）に対しては人間として土に当たるし、殷の湯王（水）や周の文武（木）に対しては漢朝の帝王として火に当たる。つまり、「生物」「王朝」といったそれぞれの領域に於いて、それがどのような位置を占め、どのような働きを有するかといったことに応じて、それぞれ相対的な属性名として五行が附与されるのである。

ただし、単なる分類概念ではなく、何らかの働きを有する実在としての五行、すなわち、「五行の気」なるものが想定されることもあった。以下の例では、五行に分類された物事同士の相互作用を媒介したり、或いは五行的属性を有する物体・性質を形作ったりするものとして、「五行の気」が想定されている。

傳曰、貌之不恭、是謂不肅……(中略)……時則有下體生上之痾、時則有青眚青祥。唯金沴木。説曰、……(中略)……氣相傷、謂之沴、沴猶臨莅、不和意也……

『洪範五行伝』に、「容貌が恭しくないこと、これを不肅（厳肅ではない）という……(中略)……時に下半身のものが上半身に生えるという痾が起こり、時に青色の眚・祥が現れる。これらは金が木を損ねたのである」とある。「説」に、次のように言う。「……(中略)……気が（他の気を）傷つけること、これを『沴』という。『沴』とは『対立する』ということと同じであり、不和という意味である……」（4）

性所以五、情所以六者、何。人本含六律五行氣而生、故内有五藏六府、此情性之所由出入也。

性が五つあり、情が六つあるのは、何故か。人は生まれつき六律・五行の気を含んでおり、体内に五臓六腑を有している。この五臓六腑が、性・情の出入りする場所なのである。（5）

前者に於いては、『洪範五行伝』の「唯金沴木」という字句を、「説」が「金の気が木の気を損なう」という意味に解している。つまり、人間の行動によって、五行の木の気が損なわれ、その結果、「下體生上之痾」「青眚青祥」といった異常現象が起こるというのである。また、後者では、人が五行の気を含んで生まれるために、体内に肝（木）・肺（金）・心（火）・腎（水）・脾（土）が形成され、仁（木）・義（金）・礼（火）・智（水）・信（土）の五つの性を持つようになるという（6）。いずれに於いても、五行そのものとして「気」が存在し、事物の形成等に影響すると考えられている。

従って、五行とは、大抵の場合に於いては物事を分類する概念であるが、しかし、特に前漢末以降では、「気」という存在として意識されることもあった、と謂えよう。

先行研究概観

古人にとって、五行は天地人に共通する原理であり、不易の法則と見なされた。そのため、五行説はあらゆる学術に入りこみ、中国人の世界観・倫理観・社会規範に強い影響を与え続けた。このような五行説について、梁啓超氏は「二千年来の迷信の大本営」と言い（7）、また顧頡剛氏は、「五行とは、中国人の思想律であり、中国人の宇宙の系統に対する信仰である。二千年以上もの間、五行は極めて強固な勢力を有している」と述べる（8）。

五行説に対し、既に明清期には疑問が投げかけられていた（9）。また、民国期以降になると、思想・学問の西洋化が推し進められる中で、五行への信仰は非難の対象となって行った（10）。そして、伏羲や黄帝が発見・制定したという説（11）を盲信せず、五行という観念が実際にいつ頃、どのように形成されたのかについて、議論がなされるようになった。

議論の口火を切ったのは、梁啓超氏が一九二三年に発表した論文「陰陽五行説之来歴」であった（12）。梁氏は、早期の文献に見える「陰」「陽」「五行」には、陰陽の消長や五行の相生・相克といった内容が含まれていないことを指摘する。そして、後世盛んに説かれるような陰陽五行説は「燕斉方士」に始まると考え、鄒衍・董仲舒・劉向がこういった「妖言」を形成・発展させ、世間に広めたと断ずる。

その七年後に顧頡剛氏が「五德終始説下的政治和歴史」を著し（13）、梁氏の説を更に推し進め、鄒衍のいた斉・魯・鄒の辺りが儒学の中心地であったことを傍証に挙げながら、鄒衍が儒家であった可能性を指摘した。つまり、子思・孟子からの儒学を受け継いだ鄒衍が、儒学に加えて、原始的な五行思想（単に事物を五つに分類する考え方）を用いて、徳運に応じて符瑞が現れることやそれらに応じた統治方法を説いたというのである。顧氏のこの論文は、こういった五行説の発祥のみならず、更に、鄒衍の唱えた五德終始説が秦漢期の政治的情勢の中で如何に変遷したかを整理している。処々に武断が見られるものの、王莽期に至るまでの五行説変遷史を本格的に論じており、後の議論の基礎となる重要な論文である（14）。

梁氏の論は鄒衍による造作を重視し、顧氏も概ねこれに基づいている。しかし、その後、早期の資料に見える五行説的要素に着目して、鄒衍が突然全てを作り上げたとせず、五行説の形成過程について考察する研究が盛んになる（15）。

斉思和「五行説之起源」（16）は、『左伝』に見える「火、水妃也（火は

水の妃である)」(昭公九年)、「水、火之牡也(水は火の牡である)」(昭公十七年)といった字句に着目し、五行同士のこういった断片的な相互関係が、後の理論的な五行思想の萌芽となったと考える(17)。また、その発展は天文の分野で遂げられたと考える。具体的には、『淮南子』天文訓や『漢書』巻二十六 天文志に見られるような、星宿を五色で区別し、日月の軌道を五色で表現するという発想が、徐々にその形を整えて五行説へと発展したと推測している。要するに、「五行」が、具体的な五物を指す用語から始まって徐々に抽象的な象徴へと化し、また地上の物であったのが天文へ適用されて用法が拡大し、やがて、それが鄒衍に至って遂に宇宙万事を包括する五行となったというのが、斉氏の説である。

胡厚宣「論五方觀念及「中國」稱謂之起源」(18)は、更に遡って、殷代の甲骨文を参照する。すなわち、甲骨文に「東土受年」「南土受年」「西土受年」「北土受年」といった四方受年の卜辞が見え、また別に「中商」という言葉が見えることを根拠に、東西南北中央という五方の観念が殷代に有ったと言う。また、「帝五臣」「帝五工」という記述から、「五」に対する意識を見出す。胡氏は、こういった五方の観念や「五」に対する意識が、後の五行説の濫觴となったと考える。

五行説について殷代に遡って議論を提起した胡厚宣氏の説は、学界に大きな影響を及ぼした。赤塚忠「中国古代における風の信仰と五行説」(19)は胡氏の説を支持し、更に発展的研究を行った。赤塚氏は様々な甲骨文資料を調査することで殷代における五方・五帝臣、及び風の信仰を考察し、四方風を四季風と見なし(20)、それを五行説の源流と結論した。すなわち、四方風が季節ごとに推移し、循環することが、後の『呂氏春秋』十二紀や『礼記』月令に見えるような、五行説を備えた春夏秋冬の時令に発展したという。そして、洪範の字句も、五材としての木・火・土・金・水の組み合わせも(21)、こういった季節の変化・循環を探究して来た経験の上で生み出されたものとして説明できるという。こうした流れの上で、五行説を「人間界、特に君主に適用」したこと、「季節の変化・循環から引き離して独立のいっそう普遍的原則と」して「王朝交代の必然的原則としたこと」、及び「「符応」を説いたこと」が鄒衍の発明であると見なす。

また、龐朴「陰陽五行探源」(22)は、胡厚宣説を更に推し進め、五方の概念の他にも、卜辞資料に「五臣」・「五火」といった言葉が見えることを根拠にし、殷人が「五」を尊んだと指摘した。それだけでなく、これらが「原始五行説」の痕跡であると述べ、殷代に既に五行的体系があったと主張する。そして、後に五行思想は五材や干支を取り込み、五味・五色・五声を加え、膨張して行った。それが、やがて出自の異なる陰陽思想や八卦思想と融合し、その融合結果が『管子』や『逸周書』の数編、及び『周易』説卦伝に見えるという。鄒衍による五徳終始説も、それは陰陽五行説の発展という流れの上に乗った発明に過ぎなかったとする。

一方、池田末利「五行説序説——五材から五行へ——」(23)は、胡氏の説について、「東南西北と中商が連続的に契卜されている例は無い」「五方観念が当時既に存在していたとしても、それが五行と関係を有する根拠は見出し得ない」とし、同意しない。

池田氏自身は、『春秋左氏伝』や『国語』に見られる字句を元にして(24)、「五行」「五材」を生活に必要な諸物質と見なし、それが「生活に必須な物質の神格化・祭祀化」されることもあった(25)とした上で、こうした物質的で相互に干渉しない五行の観念を「素材五行」「静的な五行」と呼ぶ。そし

て、それが陰陽の動的原理（相互に干渉し合い、変質すること）に触発されることで、段々と動的性質を得て行ったと考える。そして、鄒氏が「従来の素材的・断片的な五行説を集成してこれを原理化し、以て五徳終始説を創成した」と言う。

また、金谷治氏は、更に赤塚氏・龐朴氏の説をも批判する。まず、四方風が仮に時令説の源流であったとしても、時令説と五行説が結びついたのは後からのことであって、五行説の源流を四方風とすることはできないと指摘する。そして、そもそも殷代の四方風が季節の推移循環を示していたのかということについても、疑問を表する。また、甲骨文に「五方」という語が無いこと、「五火」の意味がはっきりしないことを挙げ、龐氏の所謂「原始五行説」の根拠が薄弱であると指摘する。

金谷氏自身は、『尚書』洪範や『管子』諸篇、そして楚帛書などについての考察から、次のように推測する。まず、時節の推移についての思考から時令が生じ、その過程で陰陽や気の思想も発展した（金谷氏は、殷代の四方風が陰陽や時令へ続くと推測する）。一方、五行説は、何故「五」であって何のためにまとめられたかは不明ながら、生活に必要な水・火を尊んだり土を祀ったりする伝承から、『左氏伝』に見られるような素朴な五材の組み合わせが始まり、それが抽象化されて洪範のような五味等への配当が行われるようになった。戦国中期頃までに、時令の側で、四季を四方に配することに伴って中央についての考察がなされ、楚帛書や『管子』幼官図に見られるような五行説への接近が起こり、その後に、鄒衍が五行説を季節の循環ではなく王朝交代史に当てはめて、五徳終始説を唱えた、という(26)。

なお、鄒衍五行説については、林克氏による詳細な考察がある。林氏は、鄒衍の五徳終始論の特徴を、①各王者に非視覚的な徳が備わり、②新王朝誕生時にその徳が祥瑞という形で現れ、③新王朝はそれに応じて政治制度を整える、という三点にまとめる。また、林氏は、この①の特徴に、天与で非視覚的な徳を唱えた思孟五行説(27)からの影響を見出す。すなわち、鄒衍が思孟学派の流れを受けて、従来の五材的な五行とは異なる、非視覚的な五行を設定する五徳終始説を生み出したものという。また、時令に於ける五行説は、季節ごとの非視覚的な盛徳（①に類似）が、その時節に燃やす木の煙によって可視化され（②に類似）、その気に応じて居所衣食等を規定する（③に類似）という構成となっており、林氏は、これを、鄒衍説の影響を受けたものと見なしている(28)。単なる物質としての五行が抽象的・非視覚的な概念へ発展したことと、鄒衍の位置付けとを関連させて明晰に論じており、今後も議論すべき重要な問題を提起している。

五行説は、伝統的には伏羲や黄帝が発見したとさえされて来たが、梁氏・顧氏が五行説の成立年代を鄒衍にまで下らせた。しかし、その後の研究では、むしろ出土資料などを参照しながら鄒衍以前の五行説を探究し(29)、その揺籃を殷代にまで遡って求める考察まで行われている(30)。すなわち、五行説の素材となる観念が、いつから、どのように存在し、鄒衍が五行説の整備・飛躍において如何なる役割を果たしたかということが、注目される。

以上の通り、先秦時代における五行説の形成や、その素材となった概念については多くの議論がなされている。一方、顧頡剛氏が長大な紙幅を割いて論じた、秦漢期における五行説の変遷についても、多少の研究がある。例えば、小林信明氏は、先秦期についても考察しながら、かなりの紙幅を割いて漢代の五行説について全般的に論じている(31)。また、島邦男氏も、時令文献の文面を比較し、それぞれの成立時期を推測した上で、漢代における五行説の推移について考察した(32)。これら早期の研究は、漢代五行説の推移をやや直線的に捉えた上で、広範な資料を検討しなが

ら五行説全体の発展を述べる姿勢を特徴とする。

しかし、既に李零氏や邢義田氏が指摘しているように(33)、時令説に限っても、戦国秦漢期には複数の系統があり、しかも同一系統同士でも異説を有している。ましてや五行説全体が、相互矛盾の無い体系として発展したとは考えにくい。従って、小林氏や島氏による推理には、いくらか無理がある。これからは、五行説諸系統の変遷それぞれについて綿密な研究を行い、それらの成果を綜合して、五行説発展史を記述し直す必要があるだろう。

既に、五徳終始説の分野では、讖緯説という視点から詳細な研究が積み重ねられており(34)、医学においても『黄帝内経』などに見られる五行的言説について、学派・学説の形成時期を仮定・推定し、内容の変遷を分析する研究がなされている(35)。これらの研究成果を踏まえ、補足を加えることにより、五行説の発展について新たに論述し直すことが可能になりつつある。

本研究の方針と構成

本研究では、漢代における五行説、とりわけ経学における展開について以下の二つの方針に基づいて論じる。一つは、ある程度信用できる資料のみに依拠すること。そして、もう一つは、あくまでも五行説に対する考察に留めることである。

五行に関する文献には、出自の怪しいものが少なくない。例えば、『春秋繁露』五行諸篇は董仲舒の五行説を研究する際の重要資料として扱われているが、筆者はこれを董仲舒の説とは信じない。その内容や『漢書』の記述から考えれば、後漢以降の作と考えるべきである（その理由については第五章第二節で詳論する）。このような疑問の強い文献を、本研究では極力使用しない。そのために資料が不足し、明確な結論に至らない場合もあるが、これは已むを得ない。

また、前漢から後漢にかけての五行説の変遷に関連して、様々な事柄が考えられる。例えば、前述したように五行の総合化が経学の兼修化と時期が一致することを、筆者は偶然ではないと考えている。他にも、天に対する観念の変遷といったことも、関係するかもしれない。しかし、本研究では、これらのことを詳論しない。本研究の対象はあくまでも五行説であり、その考察に留めるべきだからである。それに、そもそも著者自身の実力不足により、このように壮大な題材は論じ切れない。

第一章では、先行研究を元にして、先秦時代の五行説について整理する。この時期は、「木・火・土・金・水」の五種の名や、五行・方位・季節の配当、そして五行相勝の規則といった基本的な要素が出揃う、五行説の萌生期と謂えるだろう。

第二章では、前漢期の五行説の、特に五徳終始説・時令説及び『洪範五行伝』について検討する。これらは同じく五行を用いていても、それぞれ独自の理論・体系を有しており、異なる分野同士の内容を比較した場合には矛盾も見出される。先秦期と同様に、未だなお雑多な説が別々に発達していた時期である。また、この時期に、『洪範五行伝』・五徳終始説・時令説が徐々に儒者たちに用いられるようになった。すなわち、五行説が儒学に入りこんだ時期である。

第三章、第四章では、それぞれ劉向と劉歆による、五行説の整理・体系化について論じる。相互に異なる理論・内容を有する幾つかの五行説を、劉向親子は、易や月令の下にそれらを整合させ、体系化を進めた。

第五章では、後漢期の経学における、五行をめぐる議論を紹介する。劉向親子によって体系化が図られたとはいえ、それで落着したわけではなく、むしろ異分野間の複雑な議論が引き起こされた。この議論の複雑化が、五行説に更なる発展を準備したと謂えるかもしれない。